

# 教員養成系大学の学生は 「地理的な見方・考え方」を習得できたのか？ —愛知教育大学「地理学基礎Ⅰ」のレポート分析にもとづいて—

阿部 亮吾  
(愛知教育大学)

I はじめに	III 「地理的な見方・考え方」の習得度 と習得パターンの分析
II 「地理学基礎Ⅰ」の概観	IV おわりに

キーワード：地理的な見方・考え方，高等学校学習指導要領（平成30年告示），教員養成系大学

## I はじめに

2018年3月，新しい『高等学校学習指導要領』（以下，新学習指導要領）が告示され，2022年度から各高校での実施が始まった。とりわけ，地理歴史科においては「地理総合」と「地理探究」が設置され，話題になったのは記憶に新しい。その高校地理では，「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力」を学習者（生徒）のなかに育てるため，「地理的な見方・考え方」を働かせることが肝要であると示されている。

この『新学習指導要領』は「地理的な見方・考え方」を以下の5つの観点から整理した。

- ①位置や分布
- ②場所
- ③人間と自然環境との相互依存関係
- ④空間的相互依存作用
- ⑤地域

『新学習指導要領解説（地理歴史編）』（2018年7月）から要約すれば，①は人間や場所の分布パターン，②は人文・自然現象に彩られた場所の特徴，③は人間と自然環境の地人相関的な関係性，④は場所間がヒト・モノ・カネ・情報の移動によって取り結ばれている状況，そして⑤が①～④を内包するような一定の空間的広がりをもった区域<sup>1)</sup>（ここでは地域社会，都市，地方，

国家，大陸，地球など多様な空間的スケールが想定できる）として措定されている。すなわち，高校地理においてはこうした「地理的な見方・考え方」の諸観点を生徒自身が身につけ，かつそれらを働かせながら現代社会に向き合うことが望まれているのである。

これを受けて，地理教育学では「地理的な見方・考え方」を育成するための単元開発に関する研究が多く発表された。たとえばヤン（2020）は，長崎県佐世保市黒島の世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」を事例に，上記5つの観点のうち「空間的相互依存作用」を除く4つの観点を働かせた高校地理探究の授業を考案した。また中学校社会科の単元開発を行った小山（2022）は，地理的分野における世界の諸地域（アフリカ州）の単元を事例に，「地理的な見方・考え方」を働かせながら，貧困からの脱却を目指す地理的判断力の育成を目指した授業を提案している。青柳（2020）は，同じく中学校地理における地域調査の手法の単元を通じて「地理的な見方・考え方」を習得させる「防災」の授業を構想し，学校周辺の地域調査を交えた授業実践を計画した。しかしながら，これらの研究はいずれも単元開発の段階にとどまっており，実際に生徒らが「地理的な見方・考え方」を身につけたのかどうかはわからない。

それに対して坂田・黒河（2020）は，中学校地理のヨーロッパ州の単元において，ルクセンブルクが小国でありながら国民1人当たりのGDP世界1位を達成している要因を，特に高度人材の越境移動をめぐる「空

間的相互依存作用」に着目させる授業を展開した。授業後に実施したテストによると、授業前に比べて多くの生徒が、特定の場所が多様な人々の往来によって成り立っているということを理解できるようになったという。また高校地理において、GIS（地理情報システム）教材を生徒自身に操作させ「避難マップ」作成を中心とする授業実践を行った金田（2021）をみると、「位置や分布」「場所」「人間と自然環境との相互依存関係」「地域」に対する生徒の理解度は深まったものの、「空間的相互依存作用」の働きはやや弱かったように思われる。こうした先行研究は、授業後に評価を実施して「地理的な見方・考え方」の習得度を測っている点で優れているが、そもそも5つの観点のどこを生徒に学ばせるのかを明確に意図して各時の授業を設計・実践しているため、当該観点の習得度が上昇することはある意味当然の帰結であるとはいえない。

以上のように、『新学習指導要領』で示される「地理的な見方・考え方」の諸観点を働かせた授業実践はまだ始まったばかりであり<sup>2)</sup>、これから実践と評価が積み重ねられていくであろう。一方で、当然のことながら、こうした授業実践を指導する側の現場教員が「地理的な見方・考え方」を習得しておく必要があり、その意味で将来の教員を輩出する教員養成系大学の果たす役割は看過できない。そこで本稿では、教員養成系大学の1つである愛知教育大学の学部1年生向け前期科目「地理学基礎Ⅰ」を事例に、実際に受講した学生が「地理的な見方・考え方」をどの程度習得しえたのかを検証したい。筆者は地理学基礎Ⅰを2020年度から担当しており、本稿はその授業で期末に課しているレポート課題を分析対象とした。

## Ⅱ 「地理学基礎Ⅰ」の概観

### 1. 授業の概要

愛知教育大学では、学校教員養成課程における中学校教諭1種免許（社会）ならびに高等学校教諭1種免許（地理歴史）の必修科目の1つとして地理学基礎Ⅰが開講されている。社会科に所属する学生（1学年80名程度）に加えて、他科であっても社会の免許取得を希望する学生が年間30名程度、この地理学基礎Ⅰを受講している。

この授業は、愛知教育大学に入学した学生が、一番最初に受講する大学地理学の入門科目となっており、社会科所属の学生にとっては地理学基礎Ⅰを受けたことで地理学そのものに対する理解の手がかりを得るだ

けでなく、2年生進級時に地理学コースに進まなかった学生や他科の学生にとっては、この授業で学んだことがら、そのまま教員になった際の「地理的な見方・考え方」に影響を及ぼす可能性があるため、きわめて重要な位置づけを有しているといえる。

### 2. 授業の内容

2022年度開講の地理学基礎Ⅰのシラバスによれば、本授業の授業目標は「歴史地理学と文化地理学の視点から都市の時空間形成を読み解くことで、都市を地誌学的に理解する能力の育成を目指す」とある。具体的には、愛知教育大学が愛知県刈谷市に立地する大学であることをふまえ、身近にあって大都市圏のメトロポリスを成す「名古屋市」を題材に授業が展開されるのが、最大の特徴である。なお、きわめて幅広い学問分野の地理学であるにもかかわらず、「都市」に限定した授業内容になっているのは、授業担当者としての筆者の専門分野（都市地理学）によるところが大きい。

筆者が担当した2020～2022年度のうち、年度によって若干の違いはあるが、半期の授業内容はおおむね表1の示す通りであった<sup>3)</sup>。第2回目～第6回目までは、名古屋市ならびに名古屋駅・栄・大須地区という名古屋市を代表する3つの盛り場の空間形成史を扱う歴史地理学的な授業が展開され、後半の第7回目～第11回目までは都市文化と都市空間との結びつきを講義する文化地理学的内容となっている。また、第12回目以降に学外でのフィールドワーク<sup>4)</sup>が組み込まれることも、地理学基礎Ⅰ特有の授業内容といえよう。

しかしながら、「地理的な見方・考え方」の習得という点でいえば、本授業でもっとも重要な位置づけにあるのは初回のオリエンテーションである。オリエン

表1 地理学基礎Ⅰの授業内容

回	内容
1	オリエンテーション
2	都市空間論序説（名古屋市の400年）
3	盛り場の空間形成史①（名古屋駅編）
4	盛り場の空間形成史②（栄編）
5	盛り場の空間形成史③（大須編1）
6	盛り場の空間形成史④（大須編2）
7	地下街の空間形成史
8	デザイン都市と名古屋市の都市文化論
9	メディアとまちづくり①（円頓寺商店街の歴史地理学）
10	メディアとまちづくり②（円頓寺商店街と映画メディア）
11	メディアとまちづくり③（大須商店街の地域活性化）
12	フィールドワーク①
13	フィールドワーク②
14	フィールドワーク③
15	フィールドワーク④

（地理学基礎Ⅰのシラバスにより作成）

ーションではまず、大学で学ぶべき地理学が、一般的にイメージされるような「暗記科目」ではなく、「考える学問」であるということを伝え、そのことを理解してもらうために、日常のどんな些細な出来事であっても地理学の研究対象になることを例示する。たとえば、「道端に捨てられた空き缶」はそのまま眺めていてもただの空き缶にすぎないが、空き缶の投げ捨て状況を調査し白地図上にドットマップとして描いてみれば(図1:上図)、「集中的に落ちている場所」と「そうではない場所」があるということを発見できるだろう(位置や分布)。

次に、授業担当者である筆者が「空き缶がたくさん落ちている場所にはどのような特徴があって、あまり落ちていない場所にはどのような傾向があると思うか」と発問すると、学生らはその答えがすぐには手に入らないことに気づく(場所)。なぜならば、提示された空き缶の投げ捨て分布図は「白地図」と「ドット」の集合体にすぎず、地理情報があまりにも少ないからである。

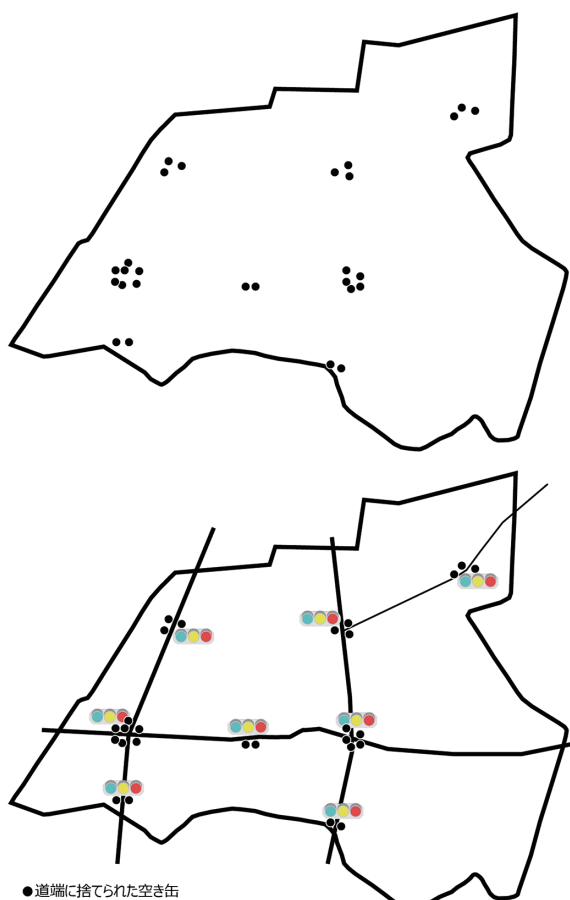


図1 空き缶の投げ捨て分布パターンの例示  
(地理学基礎Iの授業資料より転載)

注: 空き缶の投げ捨て分布図(上図)ならびに道路と信号機の配置を重ねた地図(下図)。地図は例示であって、実際に空き缶がこのように投げ捨てられていたわけではない。

ところが、この白地図に、「道路の経路」や「信号機」が示された別の地図を重ね合わせてみるとどうだろうか(図1:下図)。先に示された空き缶の投げ捨て分布パターンが、実は移動のための道路ネットワークや、通行人が足を止める信号機の配置と密接に関係していることによりやく気づくであろう(空間的相互依存作用)。この地域では、通行人の移動パターンと空き缶の投げ捨て分布パターンが連動していたかもしれないが、また別の地域で調査すれば、地形環境の違いなども相まって、異なったロジックの分布パターンがみられるかもしれない(地域、人間と自然環境との相互依存関係)。

このように、視点を変えれば何でも学問の対象になりうるということ(ここでは地理学)、そして上記のような視点こそが「地理的な見方・考え方」であるということが、オリエンテーションの最後に伝えられるのである。授業の題材は名古屋市(特定の都市)であるが、名古屋市を取り上げる各回では、随所にこうした「地理的な見方・考え方」が働いていることを、つねに学生に意識させるよう授業が設計されている。

技術論的に付言すると、ここで示された1枚1枚の地図とは、GISでいうところの「レイヤー」のことであり、それを1枚ずつ上に重ねていく行為は「オーバーレイ」とよばれる作業を指す。すなわち、上記の地理学的スキルはいわゆるGISの思考法を援用したものであり、授業内でGISの専門用語に触れることは特段ないものの、オーバーレイを効果的に用いれば、「地理的な見方・考え方」を働かせるのに役立つことが、さまざまな場面で学生には伝えられる。

たとえば、名古屋市の都市発展を理解するには熱田台地という地形環境への理解が欠かせないため、台地と平野に塗り分けられた地形図の上に名古屋城や熱田神宮などの歴史的建造物の立地がオーバーレイされたり、明治期以降に建設の進んだ鉄道路線の経路がいかに地形環境や都市環境に影響されてきたのか、また名古屋市の中心繁華街である栄や大須が名古屋城下町の町人町や南寺町を基盤にして発展したことなど、時代や種類の異なる複数の地図(主題図)のオーバーレイによって、名古屋市をめぐるさまざまな空間事象が「地理的な見方・考え方」のもとで紐解かれていくという展開である。

以上のような授業内容を受講するうちに、生徒は名古屋市を「知識」として習得するのではなく、名古屋市を「地理的な見方・考え方」で理解する視点を習得するようになる。これが本授業の狙いである。ただし、

「地理的な見方・考え方」の5つの観点を、オリエンテーションも含めて授業内で明示的に1つ1つ解説することはしておらず、授業担当者はあくまで観点を「ほのめかす」程度にとどめている。そのため、本授業内で5つの観点が体系だって学生に享受されることはない。つまり学生は、授業内容への理解を通じて授業担当者の意図するところを自らつかみ取らねばならず、そこに習得度の個人差が生じる余地がある。

### Ⅲ 「地理的な見方・考え方」の習得度と 習得パターンの分析

#### 1. レポート課題と執筆条件

地理学基礎Ⅰでは、フィールドワークを含めたすべての回が終了したのち、レポートの提出が課されることになっている。レポート課題のタイトルは「授業担当者に教えたい！〇〇における××の地理学」であり、この「〇〇」には対象地域として「市区町村名」を、「××」にはレポート作成者が取り組みたい「テーマ」を入れるという決まりになっている（例、「愛知県豊橋市における路面電車の地理学」など）。レポート課題の設定にはこれ以外の決まりがないため、その自由度はきわめて高く、したがってどのようなテーマでレポートを書くのかは学生自身にゆだねられており、日ごろの意識やセンス、気づきがレポートの内容に大きく影響を与えることになる。また後述するように、ここでどのようなテーマを選ぶのかは、「地理的な見方・考え方」の働かせか方にもある程度影響を与えることが想定される。

また、レポートの具体的な構成についていえば、①冒頭にテーマ選定の理由や背景、目的の説明を入れること、ならびに②選んだテーマに即した「地図」を必ず描くことの2点に加えて、③作成者が選んだテーマを論じるにふさわしい「場所」を「最低でも3か所」選び出し、自らがその場所に出かけて「撮影した写真」を1か所につき1枚以上添えながら、その場所の説明や分析、テーマとの関係性などを論じること、そして④取り上げた場所の位置を②の地図上に必ず明示すること、最後に⑤全体の考察を加えた「まとめ」をつけることが執筆の最低条件となっている。すなわち、「地理的な見方・考え方」のうち「位置や分布」と「場所」を織り込むことが本レポート課題の執筆条件であるため、どのレポートもその2つの観点だけは満たされているということに注意が必要である。なお、レポートの全般にわたり、授業を通じて学んだ「地理的な見方・

考え方」を働かせるよう指示が出されている（特定の観点に関する指示は出していない）。

以上の条件で提出されたレポートの構成は、一定の条件にもとづいて作成されているため作成者間ではほぼ一様なものとなるが、テーマの自由度の高さや目の付け所、取り上げる場所の違い、説明や分析の仕方などは作成者次第になるため、「地理的な見方・考え方」がどのように反映されるのかも含めて、レポート内容は実に多岐にわたっている。

以下ではまず、2020年度から2022年度までに提出された333人分のレポート課題の「対象地域」と「テーマ」の傾向が整理されたのち、学生が実際に「地理的な見方・考え方」をどの程度働かせたのかが分析される。

#### 2. 対象地域の特徴

上述の通り、レポートの対象地域は、一部の例外を除き基本的には市区町村となる<sup>5)</sup>。図2をみると、年度によって多少のばらつきはあるものの、「名古屋市」が計63人で最多となり、ついで「豊田市」(21人)、「一宮市」(20人)、「豊橋市」(17人)、そして大学の立地する「刈谷市」(16人)と「岡崎市」(16人)の順になっている。なお、毎年度110名前後の履修生がいるなかで、1割弱は愛知県外を対象地域に選んでいた。

レポートに書かれたテーマ選定の理由を読むと、こうした対象地域は学生自身の「出身地」あるいは下宿生であれば「居住地」を基準にした、と明記されていることが多く、かりに明記されていなくともそのように推測できるケースがほとんどである。したがって、この分布パターンは、そのまま学生の出身地/居住地

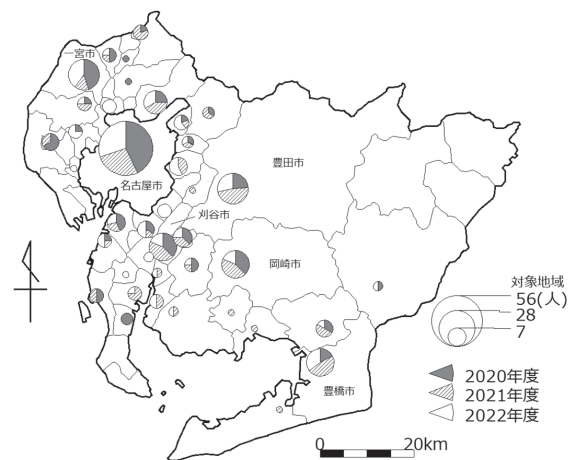


図2 レポートの「対象地域」(愛知県内のみ)

(地理学基礎Ⅰのレポートにより作成)

注: 愛知県外を対象地域としたものは図中から省略されている。

パターンを示しているものと考えられる。このパターンは、愛知県内で人口規模の大きな自治体の傾向とほぼ同じであることから、本授業を履修する学生は愛知県内からまんべんなく集まってきていると判断できる(ただし、名古屋市出身者が都市の人口規模に比べてやや少ない)。おそらく、愛知教育大学全体の傾向もそれほど違わないであろう。

### 3. テーマの傾向

レポートのテーマを筆者が年度別に分類・整理したものが表2である。なお、表2の大項目と小項目の設

定と分類はいずれも筆者の判断によっており、必ずしも学生が提出したタイトルの文言をそのまま機械的に分類したものではない。なかには複数のテーマにまたがった内容や、どう分類すればいいか判断のつかないレポートもあったため、タイトルのみから判断せずに、内容を読解したうえで適当と思われる項目へ筆者自身が分類を行った。それゆえ、この分類法には客観性に欠ける部分があることは否定できない。

表2によれば、3か年通じてもっとも多かったテーマが「商業」であった。特に、「スーパーマーケット」や「ドラッグストア」、「大型商業施設」のような小売

表2 レポートの「テーマ」と「地理的な見方・考え方」との関係性

レポート・テーマ		テーマ数				地理的な見方・考え方		
大項目	小項目	2020年度	2021年度	2022年度	計	単位(人)		
						人間と自然環境との相互依存関係	空間的相互依存作用	地域
商業	スーパーマーケット・ドラッグストア		3	7	10			
	大型商業施設	2	5	2	9			
	娯楽施設	3	3	3	9			
	ラーメン屋	5	1	3	9			
	飲食店	3	2	4	9			
	喫茶店	4	1	2	7			
	テーマパーク	6	1		7			
	コンビニ	3	1	1	5			
	宿泊施設			2	2			
	その他	4	1	7	12			
	計	30	18	31	79	4	45	23
交通	駅	9	9	6	24			
	鉄道	4	7	7	18			
	道路	2	1	4	7			
	空港		2		2			
	その他	4	5	5	14			
	計	19	24	22	65	8	48	17
都市変容	土地利用		10	13	23			
	中心市街地	5	9	8	22			
	商店街		2	2	4			
	住宅	2	1		3			
	計	7	22	23	52	10	18	27
歴史	史跡	11	9	4	24			
	寺社	3	4	3	10			
	城下町		4	4	8			
	古墳	2	1	1	4			
	街道	1			1			
	工場(軍需)	1			1			
	計	18	18	12	48	18	14	9
公共施設	公園	8	6		14			
	学校	6	2	5	13			
	公共施設	4	1	2	7			
	図書館	2		2	4			
	医療・福祉施設	1	2		3			
	その他	1	4		5			
	計	22	15	9	46	6	17	19
製造業 農業	工場	3	4	2	9			
	伝統産業	2	3	4	9			
	農業	2	1	3	6			
	その他	2	2		4			
		計	9	10	9	28	6	16
自然	河川	4	3	1	8			
	坂道	1	2	2	5			
	溜池	2			2			
		計	7	5	3	15	7	1

(地理学基礎 I のレポートにより作成)

業の店舗に着目したものが多く、また「ラーメン屋」や「喫茶店」を含む「飲食店」も少なくない。こうした小売・飲食店舗は、ふだん学生が生活するなかでも目についたり利用する機会の多い場所であろうことから（アルバイト先かもしれない）、レポート執筆のテーマに悩んだ学生が真っ先に思いつく対象である可能性が高い。おそらくは同様の理由から「公共施設」も人気の高いテーマであったが、年度を追うごとに数が減少している。とりわけ、この手のレポートでよくテーマにあがる「公園」<sup>6)</sup>が減っており、安易なテーマに飛びつく学生がいなくなったのかもしれないが、本当の理由はわからない。

次点が「交通」である。「交通」には「鉄道」や「道路」に加え、「駅」も含まれる。「駅」はきわめて分類の難しいテーマであり、たとえば「駅」そのものに着目したレポートがある一方で、駅を中心に広がる「中心市街地」の様子や「土地利用」の変遷を分析しようとしたレポートも存在する。後者の要素が色濃く表れた場合は、「都市変容」の大項目に分類した。

その「都市変容」は初年度よりもここ2年で増えてきたテーマであり、特に市区町村全体や「中心市街地」の「土地利用」がどう変わったのかを取り上げたものが多い。たとえば、日進市の人口集中地区の分布パターンを手掛かりに、オーバーレイを用いて過去の地形や土地利用と比較しつつ、住宅開発が進んだ地区とその背景を、鉄道を介した名古屋市との「空間的相互依存作用」に着目して分析したレポートなどがあつた。

「歴史」も人気のあるテーマである。レポート課題に自らの出身地を選んだ方がいいが、何も目立ったテーマが思いつかない場合でも、史跡はあつたりするものである。また、高校までの学習経緯から日本史選択者が多いという現状が、そのような傾向を生み出しているのかもしれない。

対して「商業」以外の産業（製造業、農業）はテーマにあがりづらい。愛知県が自動車産業の県であることをふまえると、いささか意外といえよう。豊田市を

対象地域にする学生のなかには自動車工場に着目する者もいるが、それよりも半田市の醸造業や瀬戸市・常滑市の焼き物産業といった伝統産業を取り上げたレポートが散見される。そのような自治体を出身地とする学生にとって、何よりも親しみのある伝統産業のほうがレポートに書きやすいと判断したのであろう。

以上のレポート・テーマは学生が自由に決めたものであるが、選んだテーマと「地理的な見方・考え方」とのあいだには一定の相関がみられることは注視すべきである。この点は後述する。

#### 4. 「地理的な見方・考え方」の観点別習得度

つづいて、「地理的な見方・考え方」の5つの観点ごとに、どの観定の習得度が高かったのかをみる（表3）<sup>7)</sup>。すでに述べたように、本レポート課題は「位置や分布」ならびに「場所」の観定が最初からレポートの執筆条件になっているため、その観定の習得を論ずることは適切ではない。そのため、以下ではそれらを除いた3つの観定を分析したい<sup>8)</sup>。

表3によれば、3つの観定のうち「空間的相互依存作用」（176人、52.9%）がもっともよく働いていることがわかる。それに対して「地域」（119人、35.7%）や「人間と自然環境との相互依存関係」（64人、19.2%）は習得度が低い。特定の観定の習得を狙った細やかな授業実践を扱う先行研究とは違い、自由度の高いテーマ選定を認めた場合、「空間的相互依存作用」がもっとも働かせやすい観定であり、逆に（防災や災害などのテーマを特定しなければ）地人相関は学生にとって想像しにくい可能性がある<sup>9)</sup>。

一方で年度ごとの違いはほとんどみられなかったが、カイ2乗検定の結果5%水準で有意な観定はなかったものの、「地域」だけは年々増えてきており、筆者の教授法が年を追うごとに熟達した結果であるのか、あるいは学生自身の資質が変化したこと起因するのかが判別できないが、高校地理で「地理総合」が始まった現在、今後も注視すべき観定ではある。

表3 「地理的な見方・考え方」の観点別習得度

年度	n	位置や分布		場所		人間と自然環境との相互依存関係		空間的相互依存作用		地域	
		人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
2020	112	112	100.0	112	100.0	20	17.9	58	51.8	33	29.5
2021	112	112	100.0	112	100.0	23	20.5	54	48.2	39	34.8
2022	109	109	100.0	109	100.0	21	19.3	64	58.7	47	43.1
計	333	333	100.0	333	100.0	64	19.2	176	52.9	119	35.7

（地理学基礎Ⅰのレポートにより作成）

5. 「地理的な見方・考え方」の習得パターン

それでは、この「地理的な見方・考え方」の習得度には、いかなる組み合わせのパターンがみられるのだろうか。表4では、「地理的な見方・考え方」の5つの観点のうち、各レポートがどの観点を働かせたのかを、「すべてを働かせた人」を習得度5に、「位置や分布」「場所」を除く「3つの観点のうち1つだけ欠けていた人」を習得度4に、「3つの観点のうち1つしか働いていない人」を習得度3に、そしてレポートの執筆条件である「2つの観点だけがみられたもの」を習得度2とした。

この分類にしたがうと、もっとも多かったのが計46.5%と約半数を占めた習得度3パターンであり、なかでも「空間的相互依存作用」パターンが卓越した。このパターンには、(実際に地図のオーバーレイを活用するかどうかはともかくとして)人の流れや物流、人口分布等に重ね合わせて現象の背景を思考するといった特徴がある。同時に、そこで終わってしまい、その現象が地形環境とどう関係しているのか、あるいは地域全体に空間スケールを広げた場合にどう位置づけられるのか、といったところまでは視野が広がっていないことを意味している。ただし、そうした深い視野までを育成しようと思うと、100人を超えるような講義形式の本授業では習得が難しく、ゼミ形式や野外実習を含む地理学より専門的な教育が必要となろう。

次に多かったのが習得度2パターンである。これは執筆条件を最低限満たしたレポートであるといえるため、おそらく学生があまり熱心に課題に取り組まなかったことを、端的に表しているにすぎないと思われる。約4人に1人がそのような状況であったが、その数は減少傾向にある。

習得度4パターンも計24.3%と全体の4分の1を占めたが、「人間と自然環境との相互依存関係」の観点

が入ったものは少なかった。地形や水文、植生や気候などの自然環境を、人文社会現象と自在に結びつけて思考するのは学生にとっていささか困難なようである。他方、「空間的相互依存作用」と「地域」の両観点が働いたレポートは少しずつ増えており、この先数年の動向をみなければならぬが、良い傾向である。このパターンが、表3で示された「地域」の上昇傾向を下支えているものと思われる。

そして最後の習得度5パターンは1割に満たなかった。1つの現象を、自然環境から始まって、人口分布や地域全体への視点までも含めて複層的に論じるといった行為は、もう少し踏み込めば地理学コースの卒業論文になりそうな質のものであり、入学したばかりの学部1年生でこれができるのは、かなり高度な地理学的想像力をもった学生といえるだろう。そうした学生の育成は、地理教育の最終到達目標のようなものである。

ところで、上記で整理したパターンは、実は学生が選んだテーマの質とも密接に関係している。表1に立ち返ってみると、「空間的相互依存作用」がもっとも強く働いたテーマは、「交通」を除くと「商業」である。ラーメン屋にしろスーパーマーケットにしろ、小売業や飲食店の「位置や分布」の背景に言及しようと思えば、必然的に集客圏への意識が重要となり、結果的に人口分布等や交通アクセスの良し悪しが視野に入ってくるからであろう。「商業」のテーマと「空間的相互依存作用」の観点はきわめて相性が良いのである。

一方、習得度の高くなかった「地域」の観点からみて、もっとも卓越したテーマは「都市変容」であった。中心市街地や商店街における土地利用の変化や、住宅開発をテーマに取り上げると、かなり広い面的な広がりを調査することになり、「地域」全体への目配りが生まれてくる。「都市変容」のテーマは「地域」の観

表4 「地理的な見方・考え方」の習得度パターン

習得度	観点					単位 (人)				傾向	
	①	②	③	④	⑤	2020 (n=112)	2021 (n=112)	2022 (n=109)	計 (n=333)		%
5	■	■	■	■	■	4	4	6	14	4.2	-
4	■	■	■	■	■	3	2	1	6	1.8	-
	■	■	■	■	■	5	6	5	16	4.8	-
3	■	■	■	■	■	16	17	26	59	17.7	↑
	■	■	■	■	■	8	11	9	28	8.4	-
	■	■	■	■	■	35	31	31	97	29.1	-
2	■	■	■	■	■	8	12	10	30	9.0	-
	■	■	■	■	■	33	29	21	83	24.9	↓

(地理学基礎Iのレポートにより作成)

注：①位置や分布，②場所，③人間と自然環境との相互依存関係，④空間的相互依存作用，⑤地域のうち、灰色セルが働いた観点である。

点と相性が良い。

最後に、もっとも習得度の低い「人間と自然環境との相互依存関係」は、「自然」そのものを除けば、意外かもしれないが「歴史」のテーマであった。現代のような都市開発技術が発達する以前の景観は、地形などの自然環境に沿って形成されたものが多く、たとえば城跡はおおむね小高い丘の上や周囲が河川に囲まれていたり、旧東海道は歩きやすい平地を通過しているなど、「歴史」と自然環境との相性は良い。もちろん、歴史的な戦は地形や気候を利用して展開されてきた。またこの傾向は、本授業の第6回目までが特に名古屋市都市空間形成史を歴史と地理、そして地形環境をオーバーレイさせながら講義するものであることと、おそらく無関係ではないだろう。その意味で、「歴史」をテーマに「人間と自然環境との相互依存関係」を働かせた人は、もっとも強く本授業の影響を受けた可能性がある。ある意味、地歴融合の典型例といえよう。

以上のように、「地理的な見方・考え方」の5つの観点すべてを働かせ、ありとあらゆる要素を縦横無尽に結びつけながら語ることでできる学生は少なく、またそのような思考を半期の授業だけで習得させることには無理がある。一方で、「位置や分布」と「場所」に「空間的相互依存作用」を働かせながら思考することは、学生にとって想像しやすい行為である可能性が示唆された。反面、防災のような特定のテーマはともかくとして、それ以外の日常的な人文社会現象を自然環境と結びつけたり、地域全体へと空間スケールを広げたりするのは難しく、それには一定の訓練が必要になることが指摘できる。実は、空間スケールをミクロなものからローカルへ、アーバンから地方へ、そして国家からグローバルへとシームレスに移動させながら思考することは、地理学のもっとも得意とする行為であることから、この訓練は地理教育において特に意味がある。しかしながら、それもまた半期の授業の範疇を優に超えている。

#### IV おわりに

本稿では、教員養成系大学としての愛知教育大学が学部1年生向けに開講する前期科目「地理学基礎Ⅰ」を例に、学生が期末に提出したレポート課題を分析することで、将来教員を目指す学生が、授業を通じて「地理的な見方・考え方」をどの程度習得できたのかを検証したものである。その結果、レポート課題の性格上、「位置や分布」「場所」については議論から外したう

で、それ以外の3つの観点である「人間と自然環境との相互依存関係」「空間的相互依存作用」「地域」のうち、学生による自由なテーマ選定のもとでは「空間的相互依存作用」の働きがもっとも顕著であることがわかった。それは、学生の日常生活にとって身近な飲食店やスーパーマーケット、鉄道や駅がレポートのテーマに選ばれやすいことと関係があることも示唆された。

それゆえ、地理教育の授業案としては、たとえば学校の周辺や市内にある飲食店や商業施設の「位置」を地図上に落として「分布」パターンをまずは発見し、そのなかからそれぞれ特徴的な「場所」をピックアップして聞き取り調査を行ったり、集客圏の観察調査を実施したり、国勢調査データから人口分布図等を作成してオーバーレイすれば、「空間的相互依存作用」の観点から飲食店や商業施設の分布パターンにロジックがあることを解明できるかもしれない。ただし、本稿でも指摘したように、「空間的相互依存作用」の先に「人間と自然環境との相互依存関係」や「地域」の観点を働かせることは難しいため、この地域の商業施設が歴史的にどのような土地条件の上に立地してきたのか、といった発問を教員自身が投げかけていくことが望ましいだろう。本稿の目的は地理教育に資する単元開発ではないため、これ以上の言及は他日に期したいが、「地理的な見方・考え方」の5つの観点を取り入れた地理教育のより一層の進展に貢献できうとすれば、幸いである。

#### 注

- 1) 『新学習指導要領』では、「地域」をとらえる際に、現在の地域だけでなく、過去から変容し未来へと変容していく地域の姿を見通した観点も必要であると示されている。すなわち、地域は空間的にも時間的にも可変的な存在としてとらえられるべきである。
- 2) ただし、坂田・黒河(2020)によれば、「地理的な見方・考え方」自体はすでに1955年告示の『中学校学習指導要領』に登場しているという。
- 3) たとえば、2022年度は名古屋市でまちづくりを実践しているキーパーソンをゲストスピーカーに招へいして講演してもらう回があった。なお、2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、フィールドワークを除いて動画によるオンデマンド型授業として開講された。
- 4) フィールドワークでは、それまでの回に机上で学んだ授業内容を体験学習できるよう、授業内で扱った名古屋城から大須地区までを歩く構成になっている。
- 5) なかには、愛知県内のJRと名古屋鉄道の路線経路の違い



といったように、対象地域を市区町村に限定しないレポートも年に数枚見受けられた。

- 6) 「公園」がテーマになる場合、ほとんどの選定理由が「自分にとって幼いころから身近な存在だったから」や「小さい頃の思い出があったから」である。しかしながら大西(1998)が論じているように、現代の公園は大人によって「プログラム化」された遊び空間であり、むしろ田畑や河川、寺社の境内といった昔ながらの遊び空間が制約され、引き換えに子どもが安全に遊ぶよう大人に誘導されてつくられた計画的な空間である。しかしながら、子どもたちはもはやそうやって大人が用意した場所に「生きた空間」を見出しており、その結果が大学生のレポートに表出したものと思われる。
- 7) 各レポートのなかで、5つの観点がどの程度働いていたのかは、レポートを採点した筆者の主観によっている。たとえば「人間と自然環境との相互依存関係」では、地形環境を示した地図と明らかにオーバーレイを試みたレポートはもとより、地図は明示されていなくとも地形の高低や河川の影響等に強く言及したようなものも含まれている。また「空間的相互依存作用」の場合、『新学習指導要領』に例示されている人口移動や物流・貿易に言及したものだけでなく、高齢化率の階級区分図をオーバーレイすることでラーメン屋の分布パターンを説明しようとしたレポートなども、店舗と人との相互依存作用に着目したものとして判断した。「地域」はもっとも分類の難しい観点であるが、ここでは「位置や分布」「場所」にかかわる必要最低限の地図を描くにとどまらず、地域全体をとらえようとしたレポートを分類した。たとえば、喫茶店の立地をテーマにした多くのレポートが、採点基準となる3か所の喫茶店の場所だけを示した最低限の範囲の地図を描画していたが、あえて市内に存在するすべての喫茶店を地図上にプロットし、市全体の分布パターンをとらえようとして個別の喫茶店の特徴を説明しようとしたレポートは、まさしく「場所」から「地域」の特徴を理解しようとしたレポートといえる。
- 8) 坂田・黒河(2020)は、「地理的な見方・考え方」の5つの観点のうち、「位置や分布」「場所」を「地理的な見方」(例、空間パターンを発見する)に、「人間と自然環境との相互依存関係」「空間的相互依存作用」「地域」を「地理的な考え方」(空間パターンの要因を説明する)に分類している。それにしたがうと、本稿では主に「地理的な考え方」の習得を議論していることになる。
- 9) 授業中に、「地形環境を知ることが都市形成のロジックを読み解く基本である」と繰り返し伝えたことと対照的な結果であった。

## 文 献

- 青柳慎一 2020. 地理的な見方・考え方と地理的技能を育成する地域学習についての一考察—地理的分野「地域調査の手法」の指導計画の構想—. 埼玉社会科教育研究 26 : 17-22.
- 大西宏治 1998. 岐阜県羽島市における子どもの生活空間の世代間変化. 地理学評論 71A-9 : 679-701.
- 金田宏樹 2021. 高等学校における地理的な見方・考え方を働かせる地理教育—GIS教材の活用を通して—. 弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻(教職大学院)年報 3 : 175-184.
- 小山拓真 2022. 地理的な見方・考え方を働かせた選択・判断する力を育む中学校社会科単元開発—見方・考え方と公民としての資質・能力の関係性に着目して—. 教育実践学研究 : 山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 27 : 433-444.
- 坂田元丈・黒河明子 2020. 「地理的な見方・考え方」を働かせる中学校社会科学習の単元開発——「ルクセンブルクの国民一人あたりのGDP」からヨーロッパの空間的相互依存作用を捉える—. 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究 15 : 1-11.
- ヤン・ジャヨン 2020. 世界遺産を用いて地理的な見方・考え方を働かせる授業の構想—「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」を事例に—. 地域と教育 : 筑波大学博士課程人間総合科学研究科学校教育学専攻「社会科教育学特講」調査報告 19 : 1-16.